

氏 名 : 居崎 時江
学 位 の 種 類 : 博士 (学術)
学 位 記 番 号 : 博乙第 4 号
学位授与の日付 : 平成 30 年 3 月 18 日
学位授与の要件 : 東京家政大学学位規程第 3 条第 3 項該当
人間生活学総合研究科
学位論文題目 : 学校における健康教育の現代的課題
～社会文化的要因、自然体験の効果の考察を通して～
論文審査委員 : (主査) 教 授 大澤 力
特任教授 岩田 力
教 授 岡 純
教 授 佐藤 吉朗
教 授 小林 辰至 (上越教育大学)

論文内容の要旨

都市化、自然の消失によって成長期子ども達の間で身体活動や自然体験を得る機会が減少してきている。それに伴い、子ども達の間で運動能力や体力の低下、生活習慣病の増加や成長期子どもに必要な自然体験の喪失といった重要課題が生じている。

一方で、身体活動や自然体験の有無が社会経済的要因による影響を受けていることが明らかになった。自然とのふれあいが自然を敬う心の形成を促すことから懸念される事態である。したがって、公共の場であり、多くの成長期子どもに関わる学校で、子ども達が身体活動や自然体験を平等に享受できる仕組みを作ることが必要であるという結論に至った。

加えて、私たちをとりまく環境を社会的環境、自然環境でとらえるところが特徴的である Education for Sustainable Development (ESD) (和訳: 持続可能な開発のための教育) と、アウトドアスポーツといった身体活動及び、キャンプや栽培活動など自然とのふれあいを中心とした自然体験活動を含む野外教育に着目した。

本論文は ESD の考え方に沿って、都会化、自然の消失が進んだ現在において身体活動や自然体験の促進方法の模索を試みた。社会的環境では、社会経済格差や性差といった社会文化的要因に配慮した学校における身体活動の促進 (第 2 章)、自然環境の側面では、子どもと自然をつなぐ人的環境である保育者や教員の資質を高めるために、養成の段階で効果的な試みができないかどうか (第 3 章) を考察した。

第 1 章では、成長期子どもの健康にとって、いかに身体活動や自然体験が欠かせないものであり、公共性の強い学校での対策が必要であるのかを考察した。

第 2 章では、社会経済的地位 (SES) や性差といった社会文化的要因、身体活動、肥満との関連性および学校において社会文化的要因を踏まえた効果的な身体活動の促進方法について考察した。2004 年、英国東ケント州の中学生 605 名 (平均年齢は 11.34 歳) および中学校保健体育科主任を対象に調査を実施した。中学生を対象にした質問紙調査では身体活動において性差は顕著であった。性要因では女児の身体活動への消極性が懸念された。SES 要因では、スポーツクラブへの加入の頻度において差があった。脂肪レベルで総皮下脂肪厚では性差が見受けられ、SES 差と性差で交互作用が有意であった。

保健体育科主任のインタビューからは、学校における書面による政策の作成、通学での歩行の促進、性差の問題、社会心理的環境要因（保護者との連携、身体活動の楽しみの享受、多様な種類の身体活動の提供、職員と子どもの良好な関係性）、物理的環境、機会の均等性、小学校における教育の改善、身体活動の健康上の恩恵の教示が課題として挙げられた。

第3章は、教員を志す日本の大学生305名を対象に質問紙調査を行い、①農業に対するイメージ尺度を作成し、②キャリア意識尺度、時間的展望尺度、自尊感情尺度との関連について検討した。項目分析および因子分析の結果より、「農業への興味・関心」「農村への興味・関心」「農業への理解・共感」の3因子構造からなる農業に対するイメージ尺度は作成された。さらに、農業に対する興味関心等が向上し、好ましいイメージを抱くことが、就労観や将来展望の変化に繋がっている可能性が示唆された。

スポーツクラブは、心身の健康、社会性の形成など利益も多いが、保護者における経済的、時間的負担も伴う。不利益群の子どもが多く通う学校では、スポーツクラブの参加以外の方法で、子どもが身体活動を獲得できる試みも必要であろう。保健体育の充実の他に、学校や家庭が自然にアクセスしやすいかどうかは身体活動、自然体験の質や量に関連していることから、学校内、近隣の自然を多く活用することも促進されたい。

自然と子どもをつなぐ人的環境、つまり、教員の資質も問われる。教員や保育者が農業や農村滞在体験等何らかの自然体験を養成校の段階で得ておくことも子どもと自然をつなぎ、身体活動量を増加させることに寄与できるのではないかと考える。

大学生が農業体験学習等を通して農業や自然に対する理解や関心を深めることは、自我発達にも関与する効果も期待できる。保育者・教員養成課程を卒業後、現場で子どもと多く接することになる彼らに農業・農村への興味や理解、キャリア意識を礎とした自己の確立が促されることは、次世代の子どもとともに、自然を活用した教育的取組を展開していく基礎力となるのみならず、保育者や教員志望者自身の自己形成にも影響を与えるのである。この積み重ねがやがて保育者や教員としての人間力になり、保育・教育現場で子どもと向き合う力、子どもと自然をつなぐ力の礎となるのである。具体的には大学等の保育者・教員養成プログラムにおいて農業農村滞在体験を積極的に取り入れるべきと考える。

子どもの健康と自然とのかかわりは密接なものであり、このかかわりをより豊かなものとするためには、教員の心身の健康および自然への理解・興味が不可欠である。保育者や教員養成の段階で農業に限らず身近な自然を利用した自然体験を得ることが望ましい。この取り組みこそが、子どもの心身の健康な発達を促し、さらには子どもに自然を愛護する力を育み、次世代に向けた自然保全への道のりを築きあげていくであろう。

論文審査の結果の要旨

本論分は、子どもの健康教育において身体活動・自然体験の重要性について新しい切り口でアプローチしていることを評価する。その独創性は、健康教育の現代的課題について ESD の考え方に沿って、身体活動や自然体験の促進方法の考察を行っている点である。

子どもが実際に身体活動・自然体験を経験する場合にも、子どもが置かれた社会的背景、即ち、経済的に恵まれない子どもは、こうした経験にも恵まれないという事実を明らかにした。できるだけ多くの子どもに、身体活動・自然体験を経験させるには、学校という場を活用することが重要であると述べられているが、当に、これが教育であろう。今後、この問題を具体化するために、どのようにしたら学校という場で、こうした経験を増やすことができるか、さらに踏み込んで研究を続けて欲しい。

次に、子どもを教育する教員に対してのアプローチについて述べられているが、教員の養成課程においても農業体験などを通して、自然に触れる機会を持ち、教員自身の自然体験値を上げることが、子どもへの教育に生かされるという考え方は非常に興味深い。

英国において修士論文に関連して 2 本の英語論文を執筆、発行されていることから、英語力については問題がない、そして、博士論文としての研究背景を考慮するとその厚みは十分にある。

結果、本論文について、研究目的・方法および結果の解釈などを総合的に審査し、博士の学位を授与されるに値すると判断した。

本研究は、これで完成ということではなく、さらに深く追求されることを期待する。